

序 論

高松 洋一

本報告書は、文部科学省「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」の財団法人東洋文庫・研究部イスラーム地域研究資料室拠点の共同研究課題「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開：オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」（代表：高松洋一）のメンバーによるこれまでの成果をまとめたものである。

歴史学の研究において利用される史料のうち、伝達を主たる機能とする「文書」と並び、照合を主たる機能とする「帳簿」が、第一次史料として最も本源的な史料価値を有することについては論を待たないであろう¹。とりわけ社会経済史や財政史など数量的な研究を行なうためには、帳簿を利用することが必須であると言える。しかしながらイスラーム史研究の分野にあって、文書に関する知識の蓄積は、我が国においても近年の古文書学的方法論に基づく研究の活性化によってある程度なしとげられつつあるのに対し、帳簿の史料学的な研究については、ほとんど未開拓の状態である。これは国際的に見ても同様であり、最も重厚な研究史を持っているはずのオスマン朝に関してですら、文書に関して体系的に積み上げられた古文書学的研究の蓄積に比して、帳簿に関してなされた研究の蓄積ははなはだ心もとない²。帳簿の構造にまつわる内在的な論理の解明よりも、財務帳簿で用いられるスィヤーカート (siyākat) 体という独特のアラビア文字書体と、アラビア語の数詞の崩し書きから生まれた独特の数字である通称ディーヴァーン数字³とに関する古文書学的な研究が、

¹ 古文書学の観点からなされた文書と帳簿の定義については、さしあたり山下有美「文書と帳簿と記録—一定説的古文書学をめぐる諸問題—」『古文書研究』第47号(1998年)、1-25頁、村井章介「中世史料論」『古文書研究』第50号(1999年)、33-52頁を参照した。

² オスマン古文書学の概説書の中には帳簿に関してある程度紙幅を割いているものも存在するが、単なる類型的な記述と若干の実例の紹介に留まっている。Велков, Аспарух, *Видове османотурски документи : принос към османотурската дипломатика*, София, 1986.

³ 今日トルコ語で *divan rakamları* と呼ばれるこの数字は、ペルシア語ではスィヤーカート体と同語源のスィヤーク (siyāk) と呼ばれる。オスマン朝時代においても *divan rakamları* という呼称が用いられていたか否かに関しては留保が必要である。

その主たるものである⁴。テキスト主体で一次的に線形に情報が展開する文書とは対照的に、数値を主体としつつ情報が二次元的に展開する帳簿の理解に関しては、文書に対するのと異なるアプローチが要求されるのが当然であり、帳簿の内包する個々の数値はさておき、とりわけ喫緊の課題と挙げるべきなのは、帳簿の根本的な構造を支える技術的な原理としての簿記術に関する研究なのである。

今日において、15世紀末にイタリアで生まれた複式簿記術が、世界中で簿記のスタンダードとなっているのは周知の事実である。この西欧起源の優れた簿記術がムスリムの手によって最初に導入されたのは、19世紀のオスマン朝であった。西欧に範を取った近代的学校教育がオスマン朝において整備されていくにつれ、フランス語で書かれた教科書による複式簿記の教育も採用され、1880年にいたってはトルコ語で複式簿記術の教則本が刊行されるようになった⁵。もちろん西欧との国際商業に従事していた非ムスリム商人によって、複式簿記がそれ以前から採用されていたことは確実であり、例えば1830年にヴェネツィアで刊行されたアルメニア語の複式簿記の教則本には、実例としてイズミルのアルメニア人商人の複式帳簿を載せていることが知られている⁶。

しかしながら、複式簿記が採用される以前、アラブ地域を含むオスマン朝の版図やイランにおいてスタンダードだった簿記術は、いかなるものであったのか。それが本成果報告書の主題であり、14世紀のモンゴル支配下のイランで確立されたと考えられるイラン式簿記術なのである。

歴史的イラン地域では、イスラーム受容以降、宗教的・学問的権威言語であったアラビア語によるアッバース朝の官僚技術の強い影響を受けていたが、14世紀のモンゴル支配下において、従来のアラビア語による簿記術を発展させ、ペルシア語の独自の術語で特徴づけられる簿記術を生み出した⁷。この時期に生まれたのが、ペルシア語で「はしご段」を意味する、ナルドバーン・パーイエ (*nardbān-pāye*) と呼ばれる新しい簡略化された方式であり、従来の簿記術で用いられていた各項目を全体

⁴ Elker, Salâhattin, *Divan Rakamları*, Ankara, 1953; Fekete, Lajos, *Die Siyâqat-schrift in der türkischen Finanz-verwaltung*, 2 Bände, Budapest, 1955; Günday, Dündar, *Arşiv Belgelerinde Siyakat Yazısı Özellikleri ve Divan Rakamaları*, Ankara, 1974; Öztürk, Said, *Osmanlı Arşiv Belgelerinde Siyakat Yazısı ve Tarihi Gelişimi*, İstanbul, 1996 が主要なものとして挙げられる。

⁵ Güvemli, Oktay, *XIX. Yüzyılda Türkiye'de Muhasebe Öğretim Kitapları*, İstanbul, 1997.

⁶ *Ibid.*, pp. 21-46.

⁷ 詳細については後掲の渡部良子「13世紀モンゴル支配期イランのペルシア語財務術指南書 *Murshid fī al-Hisāb*」を参照のこと。

の合計から見て階層的に必ず対になるよう表記する複雑な方式に、次第にとって代わることとなった。

この14世紀のイランで確立した簿記術は、イランの先進的な文明の摂取に熱心であった、新興のムスリム国家オスマン朝によっても採用されることとなった⁸。それは今日スレイマニエ図書館 (Süleymaniye Kütüphanesi) をはじめとするイスタンブールの各図書館に伝わる14世紀にイランで著された簿記術の指南書の写本の存在からも、首相府オスマン文書館 (Başbakanlık Osmanlı Arşivi) やトプカプ宮殿博物館文書館 (Topkapı Saray Müzesi Arşivi) に現存する膨大な量のオスマン朝時代の帳簿の実例からも明らかである。

トルコ共和国に伝わるペルシア語の簿記術指南書の写本としては、ヒンツ (W. Hinz) の校訂によって公刊されたスレイマニエ図書館蔵の一写本 (Ayasofya 2756)、アブドゥッラフマーン・マーザンダラーニー ('Abd Allāh Māzandarānī) の *Resāle-ye Falakīye dar 'elm-e siyāqat* が有名である⁹。この書はオスマン朝の人びとによってもよく読まれたと考えられ、イラン式簿記術のオスマン朝への伝播を考える上で不可欠な文献である。なお同書にはヒンツが校訂した写本のほかに、イラン・イスラーム共和国の議会図書館 (Ketābkhāne-ye Majles-e Shourā-ye Eslāmī) にも写本 (Majles 6541) が存在する。現在われわれの共同研究では、ほぼ月1回の割合で東洋文庫のイスラーム地域研究資料室で研究会を開き、ヒンツの校訂本をもとに、Ayasofya 2756 と Majles 6541 を対照させつつ、同書の講読を行なっている。ヒンツの利用しなかった Majles 6541 は、Ayasofya 2756 とは別系統の写本で、筆写年代は比較的新しいと考えられるものの、Ayasofya 2756 での誤記が正しく表記されている善本であることが明らかになりつつある。ヒンツの誤りを正すこうした成果をもとにした同書の訳文を、将来ウェブ上で公開することを目下検討中である。

また注目すべきことは、ペルシア語による簿記術指南書がオスマン朝で読まれていた一方で、簿記術に関するトルコ語で記された指南書はほぼ皆無であるというこ

⁸ オスマン朝のナルドバーン・パーイエ方式の帳簿に関しては、さしあたり Elitaş, Cenak *et al.*, *Osmanlı İmparatorluğu'nda 500 Yıl Boyunca Kullanılan Muhasebe Yöntemi: Merdiven Yöntemi*, Ankara, 2008 を参照。

⁹ Hinz, Walther (ed.), *Die Resālā-ye Falakīyyā des 'Abdollah Ibn Moḥammad Ibn Kiyā al-Māzandarānī: Ein persischer Leitfaden des staatlichen Rechnungswesens (um 1363)*, Wiesbaden, 1952. なお抄訳ながら、部分的なアラビア文字の翻刻も付された現代トルコ語訳、Otar, İsmail, "Risāle-i Felekiyye «Kitab-us-Siyāqat» Hakkında", *İstanbul Üniversitesi İşletme Fakültesi, Muhasebe Enstitüsü Dergisi* 34 (1984), 9-27 もある。

とである。これは書記術の指南書にもある程度あてはまることであり、オスマン朝の官僚機構における書記の養成が、低年齢からの現場における徹底した実地訓練と口頭伝承に基づいてことと無縁ではなからう¹⁰。

オスマン朝の官僚機構で作成されていた帳簿の実例からも、イラン式簿記術の影響を読み取ることはきわめて容易である。オスマン朝ではアラビア文字表記のトルコ語が官庁用語として採用され、一般的に文書はトルコ語で作成されていたのにもかかわらず、帳簿の実例を一見すれば、項目の説明を記したテキスト部分において、物品の名称や術語にペルシア語の単語が用いられるのはもとより、文全体がペルシア語の文法に基づく定型表現となっており、そこにはトルコ語の単語は全くと言ってよいほど見出されないことに気付くのである。

一例を見てみよう。以下はトルコ共和国財務省から首相府オスマン文書館に移管された帳簿群 (Maliyeden Müdevver Defterler) のうち、カイロで調達して国境地帯の城塞の糧食として送られた軍用ビスケット (peksimad) に関するヒジュラ暦1197年ラビーウ・アル・アウワル月下旬 (西暦1783年2月24日～3月5日) 付けの記録である。

berāy-ı huşūş-ı taḥḥ u irsāl-i peksimad-ı lāzime-i ba‘z-ı ser-ḥadāt-ı manşüre ki
‘an-cānib-i Mıṣr-ı Kāhire ‘acāleten daḳıḳ-eş mübāya‘a ve be-furūn-hā tevzī‘ ü taḥḥ u
tekmil ve be-Āsitāne-i sa‘ādet tesyīr ve behā vu ücret-eş ‘an-māl-i irsāliyye-i Mıṣr-ı
Kāhire vācib-i sene maḥsūb şude fermūde ber-müceb-i kā’ime-i ‘ilmūḥaber-i ḳalem-i
dīvān-ı hümāyūn el-müverreḥ fī evāḥir-i RA sene 1197[BOA.MAD 8948, s.396]

国境地帯の軍需物資のビスケットの製造と送達に関して。カイロで緊急に小麦粉を購入し、当地の製パン所に割り当て、製造、完成させ、首都イスタンブルに輸送し、代価と経費は当年のカイロの[首都イスタンブルへの]送金額のうちから決済するよう命じられた。1197年ラビーウ・アル・アウワル月下旬付けの御前会議局の通知のカーイメに基づく。

おそらく当時の官僚たちはトルコ語の発音で読んでいたと考えて、そのように転写を行なったが、ペルシア語を経由して取り入れられたとおぼしきアラビア語起源の要素もあるものの、ezāfeによる語結合はもとより、前置詞のbarāye, be, bar、関係

¹⁰ こうした問題については、拙稿「オスマン朝の文書・帳簿と官僚機構」林佳世子・榎屋友子編『記録と表象-史料が語るイスラーム世界 (イスラーム地域研究叢書第8巻)』、東京大学出版会、2005年、193-221頁を参照。

代名詞のke、接尾代名詞-ash、複数接尾辞-hā、動詞shodan, farmūdanというペルシア語の文法要素からこの一節が構成されていることは一目瞭然である。換言すれば、この記録はペルシア語で記されていると見なすことも可能なのである。

このように、オスマン朝下でイラン式簿記術に基づいて作成された帳簿の実物は、トルコ共和国をはじめとして大量に伝存しているのに対して、政治的混乱によって多くの史料が失われたイランの本土においては、19世紀以前にさかのぼる帳簿の実例はほとんど知られていない。オスマン朝においては、イラン式簿記術を理論化した指南書が著されることはなかったが、これと好対照に膨大に残された帳簿自体から、イラン式簿記術がいかなる形で実地に応用されていたかを知ることは十分に可能なのであり、帰納的にその内在的な論理を分析する余地が残されている。

さらにオスマン朝に採用されたイラン式簿記術は、オスマン朝の支配領域の拡大と軌を一にして、アナトリアはもとより、バルカン、さらにはアラブ地域においても拡大していった。アラブ地域には、コプト系官僚の活躍で知られるエジプトをはじめとして、それ以前の伝統に根ざしたアラビア語の簿記術が存在したのであるが、オスマン朝支配下にあつては、依然としてアラビア語地域に留まったのにもかかわらず、ペルシア語の術語や前置詞、動詞を使用した定型的な文言を用いた帳簿が現地においても作成されるようになったのである。このような例は、エジプトにおけるオスマン朝時代の文書と財務関係の帳簿を解説した、イブラーヒーム・アル・ムエルヒーの著書の随所に見ることができる¹¹。

オスマン朝時代に、マムルーク朝までのアラビア語の簿記術伝統を誇るエジプトやシリアにおいても、従来の簿記システムが、イラン式簿記術に基づくオスマン朝のシステムに完全に駆逐されてしまったか否かは今後の研究の課題であるが、国家における帳簿会計システムの斉一性という観点から見て、おそらく地元の行政機構において作成される帳簿に限っては、新たなシステムに置き換わってしまったのではないかと考えられる。

さて目を東方に転ずれば、イラン式簿記術はインドのムスリム諸王朝でも用いられていたことは周知の事実である。つまり16世紀以降、少なくとも複式簿記が覇権を握る19世紀までの一定の時期に関しては、東はインドから、西はアナトリア、バルカン、さらにはアラブ地域に至る広い地域で、イラン式簿記術がある程度までスタンダードな地位を占めていたといえるのである。

¹¹ el-Mouelhy, Ibrahim, *Étude documentaire: organisation et fonctionnement des institutions ottomanes en Égypte (1517-1917)*, Ankara, 1989.

このように帳簿という史料を、個別の記述内容にととまらず、簿記術という普遍的な会計技術の観点から総体的に分析しようという本共同研究の試みは、イスラーム研究においてこれまで全く見られなかった新しい試みである。一見イスラームとは直接関係ないかのように見える簿記術というアプローチは、従来しばしば行なわれてきたシャリーア、ワクフ、スーフイズムなどといったイスラーム的なものを全面に押し出したテーマ設定によらずとも、地域横断的なイスラーム共同研究の構築が可能であるという新たな方向性を示しているものと思われる。

本報告書の以下の各論は、メンバー各自がそれぞれの専門の時代と地域に関して簿記術と帳簿について論じたものであるが、それぞれが、これまで2年半にわたる研究会での議論の成果が十分反映されたものになっている。扱われる内容は、モンゴル期イランにおける簿記術指南書に見える記述、同時代のマムルーク朝におけるエジプト百科事典に見える簿記術のあり方、その後のオスマン朝で作成された帳簿の種類の諸実例、さらに19世紀イランにおける有力家系の家産に関する帳簿と、非常に多岐にわたっているが、イラン式簿記術がいかなる形で発展し、地理的、時代的に展開を遂げたかを明らかにしようという試みとしては、大きな第一歩を遂げることができたと思われる。

今後は共同研究に残された2年間の中で、イラン式簿記術の原理、術語や記号の使用法をマニュアル化して公開していくことにより、帳簿資料を駆使した研究をより促進することを目指したい。そしてイラン式簿記術の解明が、近代以前の世界各地に存在した固有の簿記術の一つとして、歴史学やイスラーム研究にとどまらず、会計学、数学史といった他分野の研究者にも事例を紹介するという形で、学際的に貢献するという可能性をも期待するものである。

(一次史料)

Başbakanlık Osmanlı Arşivi, Maliyeden Müdevver Defterler [BOA.MAD] 8948.

‘Abd Allāh Māzandarānī, *Resāle-ye Falakīye dar ‘elm-e siyāqat*, Süleymaniye Kütüphanesi, Ayasofya 2756

‘Abd Allāh Māzandarānī, *Resāle-ye Falakīye*, Ketābkhāne-ye Majles-e Shourā-ye Eslāmī, Majles 6541

Hinz, Walther(ed.), *Die Resālā-ye Falakiyyā des ‘Abdollah Ibn Moḥammad Ibn Kiyā al-Māzandarānī: Ein persischer Leitfaden des staatlichen Rechnungswesens (um 1363)*, Wiesbaden, 1952

(研究文献)

- Elitaş, Cenak *et al.*, *Osmanlı İmparatorluğu'nda 500 Yıl Boyunca Kullanılan Muhasebe Yöntemi: Merdiven Yöntemi*, Ankara, 2008.
- Elker, Salâhattin, *Divan Rakamları*, Ankara, 1953.
- Fekete, Lajos, *Die Siyâqat-schrift in der türkischen Finanzverwaltung*, 2 Bände, Budapest, 1955.
- Günday, DüNDAR, *Arşiv Belgelerinde Siyakat Yazısı Özellikleri ve Divan Rakamaları*, Ankara, 1974.
- Güvemli, Oktay, *XIX. Yüzyılda Türkiye'de Muhasebe Öğretim Kitapları*, İstanbul, 1997.
- el-Mouelhy, Ibrahim, *Étude documentaire: organisation et fonctionnement des institutions ottomanes en Égypte (1517-1917)*, Ankara, 1989.
- Otar, İsmail, "Risâle-i Felekiyye «Kitab-us-Siyaqat» Hakkında", *İstanbul Üniversitesi İşletme Fakültesi, Muhasebe Enstitüsü Dergisi* 34 (1984), 9-27.
- Öztürk, Said, *Osmanlı Arşiv Belgelerinde Siyakat Yazısı ve Tarihi Gelişimi*, İstanbul, 1996.
- 高松洋一「オスマン朝の文書・帳簿と官僚機構」林佳世子・榊屋友子編『記録と表象-史料が語るイスラーム世界 (イスラーム地域研究叢書第8巻)』、東京大学出版会、2005年、193-221頁。
- Велков, Аспарух, *Видове османотурски документи : принос към османотурската дипломатика*, София, 1986.
- 山下有美「文書と帳簿と記録一定説的古文書学をめぐる諸問題一」『古文書研究』第47号 (1998年)、1-25頁。